Japanese Association for Religious Studies

純粋愛に混じり、混合愛となる。この両者はまだ自然的な愛であるが、三番目として反自然的な愛がある。これは美しいものを産み出す欲求すら欠く場合であり、愛の片鱗は動因として残るものの、何も産み出さない醜いもの醜いことに向かう倒錯的愛といえる。

プラトンによれば、アフロディテーには二種類あるから、その子エロースも二種類に分けられることになる。一方のアフロディテーは、ウーラノスの孫にしてクロノスの娘で感性界から離存的な根源魂に相当するものであり、他方は、ゼウスとディオーネーの娘で、この地の結婚に関与する宇宙魂に当たる。前者のエロースは、父クロノス、ひいては祖父ウーラノスへと絶えず希求を向ける上方志向ゆえに神であるとされる。だが、後者のエロースには、感性界の差配のために、当然下方への眼差しもそなわってくる。前述の個別魂の場合、自然にかなった愛はダイモーンであるが、自然に反した愛は情念に堕する。個別魂が根源魂のうちに含まれているように、ダイモーンとしての個別的エロースは、全体的エロースに包摂されるという。したがって諸々の個別魂は、善美への希求において一点に収斂してゆくのであり、個別魂が相互に離在しているという通念は正されねばならない。

第三十八論攷によれば、知性には知性対象を直知する活動と同時に、いわゆる一者を直知せんとする活動があり、前者が「素面の知性」の顔であるのに対し、後者は「ネクタルに酔える知性」「愛する知性」といわれる。一者が一切の限定を絶した無限者であるからには、無限者を愛する知性の愛も無限となるはずである。

最後に第三十九論攷をみると、一者をめぐって、自己を愛する愛と表現する定式に遭遇する。一者は自己原因であるから、自己の美しさを創ったのも一者自身に他ならない。したがって、神は愛すべき美しいものであり、愛する主体でもある。その愛は、愛の対象が前提されてのちに成立するものではなく、逆に、この愛のほうが愛の対象を熱烈に望んで存立させたのである。

こうして、プロティノスの階層的哲学体系は、通常さほど指摘されないながらも、上から下まで徹頭徹尾、愛に貫かれているのであり、世界にあまねく播種されたしるしを通して神的愛の紐帯を説いたイアンブリコス（昨年の拙発表参照）と意外なほど遠くない位置に立っていることが判明した。

紀元後四―五世紀の歴史叙述における「過てる哲人王」ユリアヌス

中西恭子

紀元後四―五世紀の歴史叙述におけるユリアヌス像は「異教徒」の英雄または「迫害者の再来」としての側面を備えている。ユリアヌスの崇拝者として知られるアンミアーヌス・マルケリーヌスとエウナピオスは可能な限り「文人皇帝」の宗教実践を善意に解釈しようと試み、アクィレイアのルフィーヌス、フィ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ロストルギオス、ソクラテス・スコラスティコス、ソーゾメノス、テオドーレートスら五世紀の教会史家は典型的な「棄教者」ユリアヌスの治世を「迫害帝の再来」と教会の混乱の時代と見なし、信仰を貫いた人々の英雄的行為に言及して読者を鼓舞する。しかし、著者の宗教上の立脚点を超えた共通の文化的基盤を当時の歴史叙述に見いだす近年の研究動向に従って検討するならば、彼らはそれぞれの所属教派や教会内の社会的地位の別を超えて「過てる哲人王」ユリアヌス像を共有している。

「過てる哲人王」としてのユリアヌス評価は三七〇年代以降に定着した。その「過ち」とは、キリスト教側の死者儀礼・宗教的偉人の顕彰儀礼として新たに支持者を獲得しつつあった殉教者崇敬も含む帝国内の多様な宗教現象に対して中庸と包容力を保って接することができずに、寓意的解釈に基づく神話・英雄伝説をヘレニズム＝ローマ型の多神教祭儀固有の人工的な教義として与え、自身は慣習を踏み越えて供犠と秘儀に耽りながらキリスト教に対する弾圧を行い、自身の宗教復興政策の進捗に対して遠慮なく怒りと焦りを表出したことである。ユリアヌスが理想としたイアンブリコス派の祭祀観に基づく「哲人祭司王」の観念は同時代の著作家には共有されていない。彼らの考える「哲人王」は宇宙の究極の原理に関わる「哲学」と詩文の素養に裏付けられた自律心と包容力に富むプラトン型の「哲人王」である。

ユリアヌスに身近に関わった経験をもつ著作家がユリアヌスの死の直後に著した私的な論考はこのようなユリアヌス像の起源として重要である。リバニオス『追悼弁論』(Or. 18, 三六五年頃成立)は、ユリアヌスの宮廷とアンティオキア市参事会の仲介者を務めた修辞学者が著した追悼文である。リバニオスはイアンブリコス派の思索と儀礼には関心が薄かったが、コンスタンティヌス以後の宗教政策のもとで看過されたヘレニズム＝ローマ型の多神教と修辞学の振興を試みるユリアヌスに共感を寄せ、「プラトン派」の哲学に遭遇した結果当時の皇帝としては異例の清貧と節制を貫いて祭祀と哲学的論考の執筆に熱意を傾けた過剰な「哲人王志願者」としてのユリアヌス像を記録する。ナジアンゾスのグレゴリオス『ユリアヌス駁論』(Or. 4-5, 三六三年頃成立)は、ユリアヌスと同時期にアテナイで学んだカッパドキアの地方都市の新任司祭の立場から、皇帝の棄教とキリスト教弾圧に対する当惑を手がかりに「キリスト教時代の新しい哲人王」の可能性を論じる。よきキリスト教徒として育てられたユリアヌスは下級聖職者も務めてキリスト教を保護する為政者となるはずの人物でありながら棄教した自称「哲人王」であり、現実のギリシア語圏の文化の多様性に目を閉ざして狭量な宗教復興を志した愚帝とされる。グレゴリオスはギリシア語話者の居住圏に広がる地方宗教や「哲学」の多様性を指摘して、猥雑な挿話を含む「神話」を変更不可能な教義とみなすイアンブリコス派の宗教観の矛盾を看破する。両者は宗教上の立場は異なるが、共有遺産としての「哲学」と修辞学によって豊かにされる文化の探求という問題意識を共有している。

NII-Electronic Library Service